心のバリアフリーって？

絵本「バスが来ましたよ」（発行所　アリス館）には、目の難病により視力を失った男性が、10年以上にわたり、地元の小学生にサポートされながらバス通勤を続けた実話が描かれています。男性が不安な思いを抱え、バス停でバスを待っている時、ある小学生の児童が男性の腰にそっと手を添え、「バスが来ましたよ」と声をかけたのが始まりです。バスに乗った後も、児童の「席、ゆずっていただけませんか？」声かけに「どうぞ」と声が返ってきます。それから毎日、男性と児童の交流が続きます。そして、児童が卒業した後も、後輩から後輩に「善意のバトン」が受け継がれ、男性は無事に定年を迎えます。

児童と再会した男性は、「温かい手で支えてもらうのがうれしかった。不安だった通勤が楽しい時間になった」と笑顔を浮かべ、児童たちも「私たちも毎朝が楽しみになりました」とにこやかに答えました。ある児童は、男性からかけられる「ありがとう」の声が励みとなり、困っている人たちを助けたいという夢をもつようにもなったそうです。

この絵本を読んで、私は、目の不自由な方と通勤経路を確認するために一緒にバスに乗った時のことを思い出しました。そのバスは学生でいっぱいでした。中には、座席でスマホゲームに熱中し、足を投げ出している人もいます。私たちは、仕方なく学生の中に埋もれながら目的地まで立っていました。降りるためのボタンを押すのにも一苦労です。仕方なく私が「次、降ります」と声をかけ、目的地で降りました。結局、目の不自由な方の通勤では、バスを利用することを諦めました。

本当の障がい（バリア）は「社会の側にあり、それを取り除くのは社会の責務である」と言われています。エレベーターのボタンが高い位置にあると、車いすを使っている人はボタンが押せません。（物理的なバリア）盲導犬に対する理解が不十分なため、盲導犬を連れての入店を断られることがあります。（制度的なバリア）電車の車内アナウンスだけでお知らせしても、聴覚に障害のある人には情報が伝わらず、どうしたらいいのか困ってしまいます。（文化・情報面でのバリア）点字ブロックがあることに無関心で、その上に無意識に立ったり物を置いたりしていることを見かけます。（意識上のバリア）

障がいがある人だけでなく、高齢になると見ることや聞くこと、動くこと、伝えることが困難になる人もいます。また、妊娠中の女性やベビーカーなどで小さな子どもを連れて外出する人などは、動くことが困難になります。外国からの旅行者などは、日本語の案内板やアナウンスだけでは情報が入手できない人もいます。こうしたバリアを取り除くことは全ての人々の生きづらさを取り除くことにつながります。

バリアをなくすために大切なのが、一人ひとりの「心のバリアフリー」です。心のバリアフリーとは、バリアを感じている人の身になって考え、行動を起こすことです。

「何かお困りでしょうか？」

「私ができることはありますか？」

心のバリアフリーは、困っている人に気づくこと、声をかけることから始まります。こんな言葉が交わされると気軽に外出できるようになります。そんな三豊市であってほしいと願います。